

タンザニアの カシューナッツ加工問題



吉田昌夫

1 カシューナッツ加工の重視

タンザニアの第3次開発5カ年計画（1976／77～80／81年）においては、政府資金の総投資額の13.5%におよぶ24億4600万シリング（当時の為替レートは1ドル＝8.3シリング）を農業部門（牧畜を含む）に投下することが予定されていた。

ここで注目すべきことは、カシューナッツが最重点作物の一つに選ばれたことである。カシューナッツは1950～60年代に生産が急速に伸びたが、この伸びは政府の資金投下がほとんどなされずに小農の努力によって実現したものである。その輸出額は61年に3600万シリングであったものが、最大の輸出量を記録した74年には1億9600万シリングに伸びた。加工品も含めたカシューナッツ輸出がタンザニアの全輸出額に占める割合は、同年で9.3%に達していた。政府が将来性のある輸作物として着目し、また他に有望な作物のない貧困地域の振興（カシューナッツの主産地はインド洋沿岸のタンザニア南部すなわちムトラ州、リンディ州、コースト州で、後進地域とみなされている）のためにも重要視したのは、十分に理由のあることであった。

第2次5カ年計画の反省として、第3次計画は輸出向け農産物の加工度を高めることを強調して次のように述べている。タンザニアの輸出向け農産物の世界市場における価格変動が激しいため、農産物加工問題はことに重要であり、工業化戦略において輸出向け農産物の加工が優先的にとり上

げられるようになった。一次産品の多くのものが価格を下げたにもかかわらず、加工された商品は高い収益を得た、と。

このような農産物加工重視の戦略のなかに、カシューナッツが大きく浮かび上った。第3次計画では、当時の加工能力、年産2万トンから第1期計画として5万トンに引き上げ、6工場の新設によりこれを達成するとした。さらに第2期計画では3万トンの能力引き上げを行ない、TANITA社の工場拡張分に当たる1万3000トンをあわせて全加工能力を11万3000トンとする、と定められた。また生産面では、農業技術の向上により生産量と品質を高めることに重点をおく、とされた。

2 カシューナッツ加工工場の建設計画

カシューナッツ生産が急速に増大してきた当初その流通組織を担っていたのはインド系アジア商人であったが、独立直後の1962年には南部地域カシューナッツ公社（SRCB）が設立されて、同公社による独占買付けが始まっていた。次いで、この独占的流通機構は64年に国営農産物ボード（NAPB）に引き継がれ、さらに74年にタンザニア・カシューナッツ公社（CATA）に引き継がれて今日に至っている。生産者価格は政府によって定められ、品質により「標準」と「2級」の二つの格付けがある。74年当時のタンザニアは、インド、モザンビークに次いで世界第3位のカシューナッツ生産国であった。

カシューナッツの木はウルシ科の常緑樹である。



播種後3～4年で開花を始め、20年後には衰えると言われる。樹高10～15メートルの高い木の上の実が熟して落ちたものから、殻つきの種子の部分を取り、天日で乾燥させてから出荷する。この状態を生豆 (raw nut) と呼び、当初タンザニアからはすべて生豆でインドへ輸出され、そこで殻を取り除きカシューナッツ核 (cashew kernel) として食用に供されるか、もしくは同地から世界へ再輸出された。

カシューナッツの殻には多量の油が含まれ、この殻油 (Cashewnut shell liquid, 略してCNSL) が数々の用途に使えるので重宝されている。ちなみに日本ではウルシの代わりに塗料として使われる。また最近の最も重要な用途は、自動車などのブレーキ・ライニングの材料としてであり、摩擦係数が熱に対し不変のため重宝されるのである。カシューナッツ核の重量は生豆の20～25%、CNSLは約28%を占める。

カシューナッツ加工工場というのは、この生豆をカシューナッツ核と殻に分離し、殻からCNSLを抽出するための工場である。インドではこれを手作業で行なうが、タンザニアの場合はこれを機械で行なおうとした。カシューナッツは生豆も殻も勾玉状で、機械による分離はなかなか難しく、タンザニアが初期に導入した機械は調整に手間どった。

加工工場はイタリア資本のTANITA社がダルエスサラーム近郊に建設したものが最初であり、次いで1967年に日本のK社が国家開発公社(NDC)と合併企業を設立し、円借款を使って南部のムトワラに工場を建設した。

この2工場に加え、最終的に10工場を新設する拡張計画は、多額の外貨資金の投入なくしては実現不可能であった。これを可能にしたのが世銀からの借款である。

1974年5月、世銀はすでにタンザニアのカシューナッツ工場建設計画に対して2100万ドル(当時の為替レートで1億7787万シリング)の融資を決めていた。条件は利子率が年7.25%、返済期間は79～94年である。世銀年次報告書によれば、この融資はカシューナッツの生産量を20%増加させ、栽培農家の所得の25%増大と5000人の新規雇用を実現させるはずであった。

次いで1978年5月、世銀グループのIDAによる第2次カシューナッツ工場融資が決まった。融資額は2750万ドル(2億1890万シリング)で、条件は手数料が年0.75%であり、返済期間は1988～2028年と前回に比べて有利であった。これにより年間加工量は3万トン増加し、約3000人の雇用増大が見込まれ、外貨収入も増えることが予定されていた。

世銀融資に加えてイタリアのシシリー銀行も、TANITA工場の拡張およびトゥンドゥル(Tunduru)に新工場を建設するため、約3000万シリングの融資を行なった。このようにしてカシューナッツ加工工場拡張計画に投下された資金は、外貨で約4億2000万シリング相当、これに国内資金を加えた総額は、約6億シリングに上ったのである。

3 カシューナッツ生産の低下

加工工場拡張事業が始まった1970年代後半は、まさにカシューナッツ生産そのものの低下が始まった時であった。急速な集荷量の低下に驚いた政府は、80年代に入って生産者価格を上げ、この傾向をくい止めようとしたが、生産は低下の一途をたどり、83年度にわずかに回復を見せたものの、84年度の時点で生産3.3万トンにまで落ちてしまった。何がこのような低下の原因になったのだろうか。ここではF・エリス(F.Ellis)の分析に沿って、この原因を探ってみたい。

まずタンザニア政府が主張するのは、主として農法上および気候上の説明である。

- 農民が適切な農法（正しい剪定方法、樹木間隔、草取りなど）を行なわなかった。また農民の「なまけぐせ」という理由があったとされている。
- 農民がカシューナッツの木を放棄した。
- カシューナッツの木が老化した。
- カシューナッツの木が焼畑の火により、あるいは象によって被害を蒙った。
- 1974年の早ばつ以来、生産地域の気候が不順である。
- 菌糸性の病気（*Oidium anacardii*）が蔓延し、開花期の霧と合わさると、結実に大きな害を与える。
- 害虫、特に *Helopeltis* が蔓延した。

次に生産低下に影響を及ぼしてはいるが、その程度はあまり大きいと思われない原因がある。

- 1970年代初めはモザンビーク解放闘争の最盛期であり、モザンビークから密輸で生豆が入ってきたことによる生産量過大評価があった。
- 1970年代後半には解放闘争が終わり、モザンビーク難民が祖国に引き上げ、草取り、収穫作業などの労働力が減少した。
- ケニアに密輸で流出する生豆が多くなった。

しかし、これらの現象を惹起したことをも含め、より基本的な原因として次の三つが考えられる。

- カシューナッツの生産者価格が低くおさえられ、他の農産物生産者価格との対比でカシューナッツ生産が不利化し、農民にとって生産インセンティブがなくなった。
- ウジャマー村政策による集村化が進み、新しい居住地が、家の周辺に植えてあったカシューナッツの樹園から遠く離れてしまったことが生産に悪影響を与えた。

- 集荷活動の遅れ、格付け作業の強制、生産者への買取り代金支払いの遅延など、CATAの集荷活動の非能率に農民が反発した。

カシューナッツ生産の歴史を見てみると、その急速な成長は、農民が政府の農法上の指導によく従って達成されたという事実は見出せず、また気候条件もこの期間に特に良かったとは言えない。早ばつの年も数回あったが、生産の減退が起こった時はすぐ回復し上昇に転じている。沿岸地域の人々の「なまけぐせ」原因説は、過去の著しい生産拡大の事実によっても、明らかに誤りである。

またモザンビーク解放闘争とのかかわりについては、1970年後半以降の地域別の生産統計を見ても、モザンビーク難民の多かった国境付近のムトワラ州できわ立って生産が落ちているのではなく、生産地域全体で生産低下が著しい。ケニア国境に近いタンガ州は、もともと生産量の少ない地域で、ケニアへの密輸もあまり大きい原因とは考えられない。

こうしてみると、カシューナッツの生産者価格の問題、集村化の影響の問題、マーケティングボード（CATA）の非能率の問題がより根本的な理由として大きく浮び上がる。

政府により決定されたカシューナッツ生豆グレード加重平均1kg当りの生産者価格を時系列で見ると、1970年度に90セントであったのが、74年度に1シリング3セント、79年度に1シリング78セントとなっている。この生産者価格の農民に対するインセンティブについて、エリスは都市下層雇用の物価指数との比較、および生産地域における代替作物の価格との比較、の二面から検討を加え、次のような結論を導き出した。

1970年代後半のカシューナッツ生産者価格は、70年を基準（100）とすると、物価上昇が79年には3.4倍にのぼっていたにもかかわらず、約2倍

しか上昇していない。またその生産地で代替作物と考えられている落花生、トウモロコシ、キャッサバの生産者価格に対するカシューナッツ生産者価格指数の変化を見ても、78年度で落花生に対して52、トウモロコシに対して70、キャッサバに対して86と、相対価格の低下を見せている。これほどの低下は、明らかにカシューナッツ生産への意欲を減退させるものであり、農民が他の作物へより多くの労働力を投下するような転換を惹き起こしたとみられる。

カシューナッツの世界市場価格は、1976年以後急速に上昇し、高い水準を保ってきた。したがって一次産品の価格低迷という一般的な傾向はカシューナッツにはあてはまらず、タンザニアにとっては外貨獲得の有力な材料であったはずである。カシューナッツの生産者価格の輸出価格に占める割合を時系列に見ると、75年度までは、生産者は輸出価格の50%以上を得ていたが、76年度からその取り分は著しく低下し、79年度には29.4%にまで下っている。この結果、CATAの買付量ならびに輸出量は低下の一途をたどり、輸出単価は上ったにもかかわらず、輸出額は低迷した。

4 政府による価格決定のメカニズム

なぜ政府は、1970年代から81年度に至るまで、生産者価格をこのように低く抑えてきたのであろうか。通常指摘される点は、政府の価格決定メカニズムに次のような欠陥があったことである。

政府は輸向け農産物の生産者価格決定に際して、農務省流通開発局 (Marketing Development Bureau) の勧告を受けるが、この勧告には各産品ごとのマーケティングボードの意見が反映される。すなわち、まず最初にボードの流通コストが前年度の実績額を基準に決められ、次いで世界市場での推定販売価格からこの流通コストが差し引

かれ、最後に生産者価格が一種の残余として決定される、というメカニズムが存在したのである。これではマーケティングボードの非能率による流通コスト増大は圧縮されず、生産者価格が圧縮されてしまう。

カシューナッツの場合も、このメカニズムが、生産者価格を低く据えおいた理由として重要であることは間違いないが、同時に前述した加工工場建設事業に要した資金の返済の必要に迫られていたという要因も指摘されねばならない。ことに世銀による約4億シリングの融資は、1974年にCATAが生産者に支払った約1億2000万シリングの3.3倍にものぼる額だったのである。その第1期融資分は利率、返済期間などの条件も厳しく、返済は79年から始まることになっていた。CATAにその返済に充当する資金を出させるために、タンザニア政府が生産者価格を低く抑え、予期しない生産量の低下を招いてしまったと考えられるのである。またその低い生産者価格すらも、CATAの機能低下のため、支払いが遅延し、ますます農民から離反される結果をもたらした。

以上、タンザニアのカシューナッツ問題をみてきた。加工を国内で行なって付加価値を高め、カシューナッツ殻油という新輸出商品を作り出し、また世界市場の価格変動から受ける悪影響を軽減する、という目標をもった開発戦略が、生産低下という事態に出会って挫折したことを明らかにした。最近タンザニア政府は、生産者に対し病虫害を防ぐための普及活動や、買付け価格の引き上げと代金の速やかな支払いなど、生産・流通の両面にわたる施策を強化するようになったので、CATAの買付け量もかなり回復が見込まれている。

(よしだ・まさお/アフリカ総合研究プロジェクト・チーム)